

嶺崎寛子著

『イスラーム復興とジェンダー  
——現代エジプト社会を生きる女性  
たち——』

昭和堂 2015年 viii+323+vページ

後藤絵美著

『神のためにまとうヴェール  
——現代エジプトの女性とイスラ  
ーム——』

中央公論新社 2014年 299ページ

八木久美子

## はじめに

ここで取り上げる2冊は、ともに2000年代のはじめにエジプトで行った調査に基づいて書かれた博士論文に手を入れたものである。イスラーム法に対する姿勢、ヴェールについての意識と、それぞれに切り口は異なるものの、いわゆるイスラーム復興という現象について、そこに生きる女性たちの視点から見直す試みという点で共通している。女性の主体性に着目するという特色を両者が共有していることは、とくに強調しておきたい。

## 『イスラーム復興とジェンダー』

『イスラーム復興とジェンダー——現代エジプト社会を生きる女性たち——』は、現代のエジプト社会においてムスリムとして生きようとする女性たちが、いかにしてイスラーム法についての知識や情報を獲得し活用するかを、現地での調査に基づいて分析したものである。一言でいえば、ムスリム女性たちがもつ法識字、つまり法について理解し活用する能力の高さを論じたものということになるだろう。本書を読めば、一般に抱かれているムスリム女性の負のイメージ、厳格なイスラーム法の支配のもとで

従属的な生き方を強いられているというイメージが覆されることは間違いない。

第1章「はじめに——ジェンダー・オリエンタリズムの向こうで——」では、とりわけイスラームに関してジェンダーという問題を扱う際の難しさについて確認するかのようになり、これまでになされた主要な研究についての整理がなされる。第2章「日々、イスラーム言説を使う——女性説教師の活動——」では、イスラーム世界の宗教的指導者といえはすべて男性であった時代はすでに終わりを迎え、女性の説教師が活躍している例が紹介されている。第3章「多元的法秩序としてのシャリーアとファトワー」では、ムスリムの社会においてイスラーム法がどのように立ち現れるかを検証するが、その際に焦点となるのがファトワー (fatwā) である。なにか問題を抱え判断に迷った場合、ムスリムはイスラーム法学の専門家のもとを訪ねて助言を求めるが、その助言がファトワーと呼ばれる。エジプトの場合、ファトワー発行局やアズハル・ファトワー委員会といった公的な機関は存在するものの、そうした機関のみがファトワーを出すわけではなく、人々は自分が信頼する法学者個人を訪れることもあれば、本書が取り上げるような民間のサービスを利用することもある。本章ではファトワーの性格が説明されるとともに、エジプトの多元的な法秩序のなかでファトワーが重要な位置に置かれていることが確認されている。

第4章「日々、ファトワーを使う——生活の中のイスラーム言説——」は、「イスラーム電話」という民間の団体によるファトワー提供サービスで著者が行った調査をもとにした、本書のなかでもっとも魅力的な部分である。この団体ではわずかな「情報料」で電話によるファトワーの提供を行っているが、利用者の多くは女性である。ファトワーを出すのがイスラーム諸学の最高学府として知られるアズハル大学出身のイスラーム法を専門とする男性という点では従来と変わらないが、女性たちが中心になってこの団体を運営しているという点は興味深い。女性スタッフが顧客のニーズに合うよう、ときに厳しすぎるファトワーにストップをかけるというのは、依然として男性に独占されているかにみえるイスラーム法解釈の世界において、実は女性が深く関与している例として注目に値する。この調査から

は、「女性たちに理解のあるファトワー」が出されるよう配慮されていること、さらに女性たちも「望みどおりのファトワーを得るべく努力」という事実が明らかになる。ファトワーは法学者が有無を言わず一方的に出すものではなく、相談者と法学者の間でのやりとりの結果として出されるものであり、両者のコミュニケーションこそがファトワーを生み出すという点は、すでに繰り返し指摘されてきたが、これが女性にとってとくに重要な意味をもつことが確認されたのは重要である。

著者が集めたデータの重要性はどれほど強調しても足りない。なぜなら、ファトワーを求める人々の抱える問題は、結婚、離婚、相続、果ては性行為に至るまで非常にプライベートなものであることも多いため、相談者と法学者が対面でやりとりする場に第三者の同席が認められることは少ないからである。しかしながらそれと同時に、著者の調査方法を問題とする見方がありうることも指摘しないわけにはいかない。なぜなら、著者は調査に関して「イスラーム電話」の承諾を受けており、ファトワーを出す法学者の側は著者が調査を行っていることを知っているものの、利用者の女性たちはこの事実をまったく知らされていないからである。この点について、著者の見解が簡単にでも示されていればよかったのではないかと思う。

第5章「ファトワーにみるジェンダー意識と法文化——婚姻と姦通を中心に——」では、婚姻、姦通に焦点を当て、イスラームにおけるジェンダー規範が一般論として概観されている。第6章「結び 差異は恵みである——イスラームと生きるということ——」では全体のまとめとして、女性たちがイスラーム言説を見事に使いこなしている現実を踏まえ、イスラーム言説には多元性があること、一枚岩の宗教的権威によって生み出されるのではなくつねに多様であり、その結果、女性たちは複数の選択肢を与えられているという指摘がなされているが、これは的を射ている。

以上見てきたように本書は野心に富んだ試みであるが、足りない部分がないわけではない。たとえば、女性たちがファトワーを「資源」として利用するにしても、ではなぜ女性たちはそうするようになったのか、その歴史的、社会的な背景が十分に問われていない。女性たちの教育水準が上がり、「資

源」を自在に使いこなす力をつけたから、女性が弱者であるがゆえに「資源」を必要としたから、という説明では足りない。タイトルが示すとおり、「イスラーム復興」と絡めてジェンダーを論じるのであれば、社会全体においてイスラーム言説の力が増したがゆえに彼女たちはそれに向かった、彼女たちもまた動かされたという可能性についてもっと考慮すべきだろう。半世紀でも歴史をさかのぼりエジプト社会の経験した変化を丁寧追えば、より深い考察が可能になったのではないかと悔やまれる。同様に、「2000年以後、ヒジャーブ人口は明らかに増えた」(47ページ)などの記述には問題があるだろう。1980年代にはすでにヒジャーブ(hijab)、つまりヴェール着用者の数は着実に増加しており[Guindi 1981]、1980年代からヒジャーブに関する研究が次々と発表されたのはそのためである。世紀末に突如として大転換が起きたわけではない。

最後に細かい点ではあるが、著名な人物の名前に関して明らかな誤りがある。Bryan Turnerは「バルヤン・ターナー」(16ページ)ではなく「ブライアン・ターナー」であり、「ユーセフ・カルダーウィー(Yūsuf al-Qarāḍāwī)」(35ページ)ではなく「ユースフ・カラダーウィー(Yūsuf al-Qarāḍāwī)」である。

### 『神のためにまとうヴェール』

『神のためにまとうヴェール——現代エジプトの女性とイスラーム——』は、今まさに触れた、ヒジャーブ(ヴェール)を身に着ける女性の増加という現象について論じたものである。本書は第1部「聖典とヴェール」と第2部「ヴェール着用を支えたもの」からなる。第1部は、第1章と第2章から構成され、第2部は第3章から第5章までがそれにあたる。全体の見取り図としては、第1部で議論の大前提が示され、第2部において著者のオリジナルな議論が展開される。

第1章「クルアーンとヴェール——啓示の背景とその解釈——」では、ヒジャーブ着用をムスリム女性の義務とする見解の根拠とされるコーランの章句を取り上げ、それらがどのように扱われてきたかをまとめている。著者が示しているとおおり、これらの章句が意味するところはまったく明確ではなく、い

かなる解釈も可能とすらいえる。第2章「現代エジプトと『ヒジャーブ』——ヴェール着用の義務をめぐる議論とその根拠——」では第1章の議論をさらに展開し、現代のエジプトで注目を集めた2人の論客による議論を紹介している。義務か否かをめぐり、アシュマーウィーとタンターウィーという2人の大物が正反対の見解を出したことを、解釈の多様性の例として挙げている。

第3章「ヒジャーブをまとうまで——宗教冊子と説教テープが伝えるヴェール着用の理由——」では、2000年代前半のエジプトでヒジャーブ着用を訴える言説がどのような形で流通したかを検証すべく、広く巷に出回っている宗教冊子と説教テープという2つの媒体が取り上げられる。こうした媒体をとおして流通する言説が、エジプト社会でどれほど「権威」あるものと受けとめられているかについては議論の余地はあるが〔八木2011〕、イスラーム諸学の専門家であるウラマー（*‘ulamā*）の語りが必ずしも人々の心を捉えきれないのに対し、これらの媒体で語られる言葉は人々の心にストレートに響く。ヒジャーブに関していえば、これらの媒体ではその着用は神の命令であり、それに従う者は天国に行き従わない者は地獄に落ちる、というきわめて単純かつ明快な語り口が取られている。この第3章から次の第4章は、女性たちが何を讀み、何に耳を傾けたかに迫ろうとする著者の熱意がよく表れている部分である。

第4章「人気説教師とヒジャーブ——ヴェールの流行と言説の変化——」では、第3章の議論を受け、これらの言説の内部には実は多様性があることを明らかにしている。おそらくこの章は、本書のなかでもっとも重要な部分であろう。著者はウラマーではないにもかかわらず人気を博している説教師アムル・ハーリドに着目し、その語りの特性について議論する。ハーリドは、多くの女性をヒジャーブ着用を誘ったといわれている人物である。ハーリドの特徴を理解するための準備作業として、丁寧に説明されるのが「フィットナ（*fiṭna*）」という概念である。イスラームにおける女性の位置を議論する際に必ずと言ってよいほど言及されるが、これは災いや騒乱を意味するとともに、女性の魅力をも意味する語である。重要なのは、同音異義語と捉えられるのではなく、2つは関連づけられ、災いや騒乱の源泉に女

性の魅力があるという理解を生むという点である。つまり、女性の魅力は男性を誘惑し、過ちに陥れ社会を乱すがゆえに、ヴェールで覆い隠されなければならないという論理につながるのだが、まさにこの論理を退けるのがハーリドなのである。ハーリドの語りにおいてキーとなる概念は「ハヤー（*ḥayā’*）」である。日本語にすれば「恥じらい」「慎み」ということになろう。ただこれはムスリムの女性の美德として一般的に挙げられるものであり、とくにハーリド独自のものではない。重要なのは、ハーリドが「フィットナ」ではなくこの「ハヤー」という概念を持ち出し、高い道徳心をもつムスリム女性としての誇り、自尊心に訴えることで多くの女性たちをヒジャーブ着用に向かわせることに成功した点だという。ただ著者は「ハヤー論において、ヒジャーブは信仰の指標となった」（205ページ）としているが、Mahmoudがすでにその著書のなかで、女性たちの間で「ハヤー」の概念が重視されていることについても、さらにはヒジャーブが「*critical markers of piety*」となっていることについても論じている〔Mahmoud 2005〕ので、これについては注記しておくべきだっただろう。

第5章「芸能人女性の『悔悛』とヒジャーブ——ヴェール着用を支えた出来事と思想——」では、女優やダンサーといった女性たち、言い換えればヒジャーブを身に着けることが不可能な領域で活躍してきた女性たちが「引退」してまでもヒジャーブの着用を選択した事例を取り上げている。こうした女性たちの「悔悛」のほうが時間的に先行していることを踏まえ、彼女たちの選択が、必ずしも前章で検討した冊子や説教師たちに影響されたものではなく、内面的な格闘の結果であるという指摘は注目に値する。

これまでになされたヒジャーブに関する研究は、大きく分けて2種類に分けられるだろう。ひとつは西洋諸国の「移民」ムスリムのヒジャーブ着用を「ホスト社会」を揺るがす「社会問題」として取り上げるもの、もうひとつはヒジャーブ着用を女性の主体的選択とし、ヒジャーブを女性抑圧の象徴とみることへ異議を唱えるものである。本書が後者であることは明らかだが、他の多くの研究とは一点異なる。一般にこの種の研究では、女性がヒジャーブを選択した理由を、公的空間に身を置き社会参加す

るための戦略的な選択とすることが多い。これに対して本書の著者は、女性たちの信仰心と直接に結びついたものとしてヒジャブの着用をみる。ヒジャブを着用した女性たちは礼拝を欠かさなくなるなど、実践においても変化があるという指摘は興味深い。

しかしながら、重要な考察がなされているだけに、やはり欠けている部分が気になる。というのは、かつて都市の教育ある階層ではほとんど消えつつあるかに思われたヒジャブの着用という実践が「信仰の指標」という意味を（再）獲得した理由はどこにあるのか、といった視点が欠けているのである。たとえば、なぜ1960年代にヒジャブは「信仰の指標」たりえなかったのか。その時代は、信仰を失っていた時代とみるべきというのか。そうではないだろう。本書の焦点が、ヒジャブを着用していなかった者が着用することを選択した経緯や動機にあてられているのだとすれば、上記の視点は落とすことができないはずである。さらに加えるとすれば、なぜほかのいかなる側面でもなく衣服だけが、それも女性の衣服のみが「指標」になったのかについて、簡単にでも触れる必要があっただろう。たとえば、衣服は記号であるという一般的な命題を十分に考慮に入れてさえいれば、全体としてより深い議論ができたのではないかと惜まれる。

### おわりに

現地での丹念な調査と資料収集に基づいたこの2冊が、現代のイスラーム研究、とりわけジェンダーという側面からの研究にとって、意義深いものであることは言うまでもない。ムスリムとして生きる女性に寄り添い、彼女たちの声に耳を澄ますという作業が女性にしかできないものであるとすれば、この

ような優秀な女性研究者の登場はまさに待ち望まれていたものであった。

ただ繰り返しになるが、2冊に共通していえるのは、歴史的な視点が十分ではないという点である。その結果として、社会全体におけるイスラームへの傾斜という局面があまりにも軽視されている印象が拭いきれない。女性は押し付けられてヒジャブを着用しているわけでもなければ、イスラーム法の支配に黙々と従っているわけでもなく、主体性、能動性をもち、自ら選択しているのだという主張はよく理解できる。しかしもう一歩踏み込んで、人間の生き方というものは、完全に受動的なものではありえないのと同時に、ひたすら能動的なものでもまたありえない、という点について考察する必要はないだろうか。こうした視点を取り入れることによって、より厚みのある研究が可能になるのではないかと思われる。

### 文献リスト

〈日本語文献〉

八木久美子 2011.『グローバル化とイスラーム——エジプトの「俗人」説教師たち——』世界思想社.

〈英語文献〉

Guindi, Fadwa El 1981. "Veiling Infitah with Muslim Ethic: Egypt's Contemporary Islamic Movement." *Social Problems* 28 (4): 465-486.

Mahmood, Saba 2005. *Politics of Piety: The Islamic Revival and the Feminist Subject*. Princeton: Princeton University Press.

(東京外国語大学大学院教授)